

人を育む

# 内発力

豊かな環境にありながら、子供たちの不安が募っている。  
沈黙を恐れ、ひたすら明るい自分を演出する。  
このような状況を作ったのはわれわれ大人たち。  
次の時代の教育を考えるために、  
教育の現状を見つめ、今必要なものは何か、  
ともに考えていきたいと思う。

取材・文千葉 望 写真栗原克己

恵泉女学園中学・高等学校校長

# 安積力也

Rikiya Azumi

私立の恵泉女学園の校長を務める安積力也氏は、自らのキリスト教信仰に基つき、かつてはキリスト教主義の普通校、そして聴覚障害のある子供たちのための日本聾話学校に勤務した経験を持つ。その中で、健常者であれば聴覚障害者であれ、子供たちが内にもっている素晴らしい可能性を見出すために何が必要か、常に自問自答してきた。そして今、社会の矛盾を大人の代わりに背負うようにして苦しむたくさんの子供たちを見て、われわれ大人に欠けているものは、子供の内発的力が育つのを待つ能力だと考える。本当に大切な力は、教え込むことはできない、大人にできるのは子供を信じて待つことだけだ。簡単なようでいて、実はもっともむずかしい「待つことの意味」を、日本聾話学校での深い経験をまじえつつ、語っていただいた。

## 「沈黙」を恐れる子供たち

今の子供たちをとりまく環境は一昔前とは随分違っているのではないかと感じます。そこで本日は安積先生に、子供の置かれた現状の問題点と、これからの課題についてうかがいたいと思っています。

安積 私はここ世田谷の恵泉女学園に六年前に招聘されてきた校長です。九一年までは新潟県のキリスト教主義の高校で教え、それから聴覚障害児の教育に九年間か

わって、久しぶりに普通教育、しかも首都圏の私立中高女子一貫校というところに戻って参りました。ところが普通教育の現場から離れた九年の間に、ある尋常でない変容が子供たちの間に起こっていることを痛感しています。

今、「普通の」と呼ばれる子供たちが、妙に素直で、妙に明るいです。友人関係の中でも、

彼女たちは常に明るい側面、肯定的側面を共有することに必死です。お互いに明るさだけを確認しあっている。極端な言い方をすれば、恐怖にかられながらも明るがっているような気さえします。親や教師、友人の期待に合わせた自分を必死に生きようとしているかのようで、非常に不自然なものを感じます。

なんだか痛々しいですね。

安積 そうなんです。また、子供たちは、人と一緒にいるとき

## 子供の成長を待つ力の喪失

しかし、思春期にはその暗闇に自ら向き合う体験も重要だと思えます。

安積 おっしゃるとおりなので。思春期には、心の中に人を入れない世界が出来てしまう。これも必然です。内と外のふたつの自分とどう折り合いをつけるのか、その中での新たな自己発見は重要なのに、今はそれがひどく見つけにくい。子供たちは大変な不安の中で生きているのではないのでしょうか。そして

の沈黙を非常に恐れますね。沈黙すれば、自分の眼を内面に向けざるを得なくなりませう。そうすると子供たちの心の中にある暗闇を予感してしまふ。本当は暗闇の中にもすばらしい宝があるのですが、その意味も、見る力も教えられていない。ただ暗闇を不安がり、それを直視したら、アウトだと思っている。今の子供たちは恐れや不安から自分を防衛する知恵みたいなものを既に強く持っているという気がします。

その不安の根っこには、われわれ大人社会が持っている尋常でない恐れと不安が存在していて、実はわれわれこそが担って解決すべき問題を子供たちが肩代わりさせられて苦しんでいるのではないかと思えてなりません。

現代はテロや災害など、自分の生命が脅かされるような不安を、誰もが心の底に抱えている。戦争への不安、リストラの恐怖もあります。それを見ながら、子供たちはその先を生きていか

恵泉女子学園高校の吹き抜けのある図書館で。大学並みに書籍や雑誌が所蔵されている。同校は情操教育にも熱心で、来校し演奏会を開いた交響楽団の寄せ書きも飾られていた。



なければならぬ。親や教師は、少しでも子供が安全に生きていけるように、さまざまな心配りをします。

ところがそれが逆に子供を苦しめる。親や教師はつい、早く目に見える成果を出す子育て、教育をしてしまつからです。行政も早い成果を求めますし、きちつとした秩序を持つた次の国民を育てようとする意識が非常に強くなり、強権的になるおそれをはらむわけです。

つまり、われわれ大人社会が子供の自然な成長を待てなくなっている。それが私には見えてしまつのです。もちろん、経済

や政治の世界では、待つてはいけないことがたくさんあると承知しています。しかし教育の世界は、世界にふたりとしないこの子固有の資質を、どうしたら一〇〇％花開かせることができかに注目するものです。その子のいちばん深いところから出てくる願いに立つて、自分が生きたいと願つ、「本当の自分」に目覚め、実際に生きていく基盤を作らなくてはなりません。そのためには子供の内側から育つてくるものを待たなくてはいいけないのですが、その姿勢が親御さんからも教師からも失われつつあるのです。

**早期教育なども盛んですが、本来育てるべきところを置き去りにして、知識だけを子供は吸収していくわけですね。**

**安積** 今の子供たちは外発的な反応はすぐれていますよ。しかし子供固有の資質を引き出すためにはそれではだめなんです。自分の心の奥底に存在するものの上に立つて、外の現実を生きようとする内発的な力こそが重要なのですが、これが本当に育っていない。それでは内発的な力をどうすれば回復することができるのか。それは、この国の大人たちが何を取り戻さなければならぬのかという問いに通じていきます。

恐れを根底に持つた子供へのかかわりは、それがどんなに熱心なものであつても、実は子供の心を閉じさせていく。子供たちをなんとかしたいと、実にさまざまな立場の人が熱心に努力を続けています。しかしその根底に恐れがある限り、子供の心は閉ざされ、すばらしい資質が枯渇していつてしまいます。

それでは今何が必要か。それ

は恐れの特極にあるもの、つまり愛です。愛とは開かせる力。子供たちはその違いを敏感に感じ分けますよ。

**子供の今だけを見るのではなく、もっと深い心の歩みやありさまを見なくてはならない。**

**安積** 今、外目に見える結果からものを見ていくと、すぐに「この子はこつこつ子供だからだめ」と評価しがちです。しかしそれは子供の力や可能性の限界ではなく、見ている親や教師の洞察力の限界なのです。それを子供の限界と見る陥穽かんせいに落ちてしまつていくんです。

本校の創立の目的は、一言で言えば、「次の時代の」平和の原因となるような女性を生み出すことにあります。世界が平和になり、それぞれが多様に自分の資質を開花させ、国境を越えて互いに交流しながら心も物質も豊かな社会を創造する女性を生み出したい。政治や経済はたしかに、「今」が大切でしょう。しかし、教育とは五〇年、一〇〇年先のこの国や世界に責任を負う仕事なのです。

## 子供を萎縮させる「教師根性」

子供たちを見ていますと、小学生までは素晴らしい柔軟性を持っていると感じるのですが、中学生になると型にはまっていくように思われます。また、先生方も皆さん熱心なのに、生きることを伝えるという肝心なところが弱いようにも思いますが。

**安積** まさにそれが問題です。私もずっと教師をしてきましたので、自分の問題としてわかるのですが、どうしても指導意識、教師根性が身につけてしまいません。でも、長く教師をやってきて、私自身、悔しいけれども認めざるを得ないことが一つある。自分がいちばん生徒に教えたこと、わかってほしいと思うこと、それは教えることができるということ、それは教えることができるということ、それは教えることができるということ、科学的真理は教えられる。でも、生きることの真理、たとえば思いやりや愛とはどういふことなのか、信じるとは、勇気とは。これらはどんなに言葉を尽くして説明しても、実は教えられるな

い。子ども自身がそれを自分で生きてみないと、わからない。人生にはそういう真理があるのだと、しっかりと目を向けなければ教師としてとんでもないことをしてしまうことになると思つたのです。そのときに邪魔をするのが、教師の指導意識なんです。

**先生たちも、進学実績をあげるというふうに、いろいろなブレッシャーをかけられて、忙しか**

## 鮮烈な日本聾話学校での体験

**日本聾話学校では、手話を使わず、わずかの残存聴力を生かしながら、会話の能力を高めていくと聞きました。**

**安積** はい。私たちの耳は自然に多くの音の中から自分にとって大切な音を聞き分ける能力を持っていますよね。そのときの聴き方は英語の「listen to」です。健聴の赤ちゃんであれば、真っ先にお母さんの声を聞き分ける。どうもお

つ疲れていますね。

**安積** 教育の場も成果主義になりつつありますからね。自分のクラスからどれだけいい大学に入れたかみただけで評価されてしまう。そうすると結果を求めることに汲々として、指導意識を強化することになる。ただ、私は希望を捨ててはいませんよ。教えることができない大切なものを、実は伝えられる教師のあり方があるのだということとを、前任校の日本聾話学校で、本当に目がさめるように教えられた経験を持っていますから。

父さんではないらしい(笑)。なぜこの聴き方ができるか。それは、赤ちゃんにとって大切な他者が生まれたからです。われわれが日常生活の中で、自分にとって大切な人やものを、より深く豊かに創り出し、その関係性を深めていけば、それによって、「listen to」の感性も鋭くなります。またこの聴き方こそが、実は私たち人間の力の根源にある言葉

を生み出す源泉なのです。それを私は日本聾話学校に行つて気づきました。

乳児の場合、親御さんが障害に気づくのは時間がかかります。どうもおかしいと思つているものの、はっきり宣告されてみると、その衝撃はすさまじい力で親御さんを打ちのめします。先天性の聴覚障害には遺伝性の場合が多く、親御さんが健聴者



週に一度、全校生徒が参加して礼拝が行われる。そこでは生徒の代表が持ち回りで「感話」を行う。自分の内面を見つめ、それについて用意した原稿を読み上げる催しである。右は感話をまとめた小冊子。左は生徒から届いた手紙やカード。

あづみ・りきや 昭和19(1944)年栃木県生まれ。国際基督教大学大学院修士課程(教育哲学)修了。在学中にキリスト教に入信。新潟市に創設されたキリスト教主義の私立敬和学園高等学校で教鞭をとり平成2年教頭。平成3年、私立で唯一の難聴児の学校である日本聾話学校から招聘され、難聴の子どもたちに教えるというまったく新しい仕事に取り組む。平成7年校長。12年私立恵泉女子学園中学・高等学校の校長に招かれ、現在に至る。



でもその因子が隠れていることがあるんです。そうすると、お子さんの障害がわかった時点で両親は深い後ろめたさを子供に対して持つてしまうことが多いし、中には夫婦がぶつかりあって、離婚に至る例さえあります。さんさん苦しい思いをして聾話学校にたどりつく親御さんの中には、子供に語りかけることすら出来なくなってしまう方がいるんですよ。

子供の対するかわいさの感覚さえ破壊されるほどの衝撃。お母さんの一人は私に「障害がわかったときに、この子が突然私の手が届かない場所に行ってしまういました」とおっしゃいました。過酷です。しかし親だから責任を持つて育てなければならぬ。親御さん

の反応はさまざまで、実に一生懸命手をかけていても、後ろめたさゆえに甘やかすすぎたり、または責任感だけの子育てになってしまったりする。でも「手をかける」だけの子育てと「心をかける」子育ては、違うのです。責任感だけの行動か、自分の心の奥を開いて、愛情を込めて子供の世話をしているかどうか、子供は敏感に違いを感じ取ってしまいます。子供はまったくごまかしがききません。

責任感だけの子育てをしていきますと、子供の心の中にしみこむようにお母さんの存在が入っていかない。何よりも大事な存在にならない。すると子供に言葉が生まれてきません。一方甘やかしてばかりいると、今度は健全な自我が育ってこないし、言葉が発達しない。日本聾話学校の教育目標は、最新の補聴器を使い、残存聴力を生かして最後には音声言語が話せるようになることです。だから絶対に必要なのは、いったん断ち切られた母と子の関係を回復することなのです。そのためにスタッフ

聞き手/日本銀行情報サービス局長  
湯本素雄

内発力  
のかたち

「科学技術振興機構」脳科学と社会」研究開発領域」小泉英明 日立製作所フェロー・脳科学者  
内発力を育てる

# 脳機能測定法の可能性

少年犯罪が増え、それが低年齢化し、いじめや不登校の問題も増えている。  
このような社会の中で子供を健やかに育てるために、  
われわれ大人たちは何をすべきなのだろうか。  
こんな大テーマに取り組む脳科学者の声に、耳を傾けてみたい。

取材・文 千葉望 写真 栗原克己

## 「ちょっと気になる赤ちゃん」が増えている

子供たちが危ない。そう言われはじめたのはいつのころのことだったろうか。キレる子供、突然暴力をふるう子供、無表情な子供。最近では乳児の世界にも、「ちょっと気になる子」が増えているという。

脳科学の研究者・小泉英明氏は、最近長崎で、乳幼児教育に携わる人々と話し合う機会を持った。九州地区の保育園園長や保育士の集まりが長崎で開かれ、そこで講演したのである。

「そのとき皆さんがおっしゃったのは、『障害がない子どもたちの中で、ちょっと気になる子が

増えている』ということだったんです。無表情だとか、とつびな行動をとる、話しかけても目を見ない……。これは小児神経科とか小児科のお医者さんたちも気づき始めており、そのパーセンテージは一〇%、地域によっては二〇%ともいわれています」

なぜ子供たち、とりわけ乳児までが「ちょっと気になる子」になってしまっのか。感覚的に

はいろいろと理由を思いつく。

IT社会が発達し、子供とのコミュニケーションや語りかけが減ってしまっているのではないか。知識つめこみが先行しすぎているのではないか。熱心な親たちはあれこれと情報を集め、少しでもわが子がそうならないようにしたいと行動する。だが、「ちょっと気になる理由」を科学的に分析できないままでは、結局のところ感覚知でしか物事をとらえられず、不安は募るばかりだ。

## 子供を追跡調査すると見えてくるもの

小泉さんは、九五年に光トポ

グラフィ法を発表。画期的な脳機能計測技術として国内外で高い評価を受けてきた。光を使って大脳皮質の血流量を測定するため、安全で負担のかからない脳機能計測法である。計測されている人が束縛される必要がないため、これまでは不可能と思われてきた乳幼児の脳機能描画などもできるようになった。それでは赤ちゃんの脳を光トポグラフィで計測すると、何かわか

るのだろうか？

「発達心理学の世界では仮説がたくさんあるものですから、その中のどれが本当に正しいのか、絞り込むのがむずかしいんです。問題を起こした人の脳だけを調べたところで、それが問題特有のケースなのかどうかは、何も問題を起こさなかつた人の脳と大規模に比較してみないとわからない。今日本では、生まれたときからある集団を追跡調査して、一緒に寄り添うようにすつ

と長期間見ていくという研究が始まっています。各地域でやるタイミングも、条件を同じにします。そうやって集めたデータを統計的にきちんと検証していくわけです。そのときには神経学的な基盤がどうしても必要になります。行動学的な観察や光トポグラフィなど、いろいろな手法が開発され、科学的分析が可能になりました」

もともと赤ちゃんが大好きだったという小泉さん。自分の研究成果が乳幼児の発達心理学に応用され、問題が明らかになれば、いくことへの期待は大きい。世界的にも注目が集まっていて、小泉さんは〇三年にローマ法王

小泉氏が開発した光トポグラフィによって脳機能の計測を受ける女の子。拘束されないので乳幼児の計測も可能だ。写真提供：日立製作所



こいずみ・ひであき 日立製作所フェロー（役員待遇）独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センターの「脳科学と社会」研究開発領域で領域統括も務める。東京大学教養学部基礎科学科卒業。

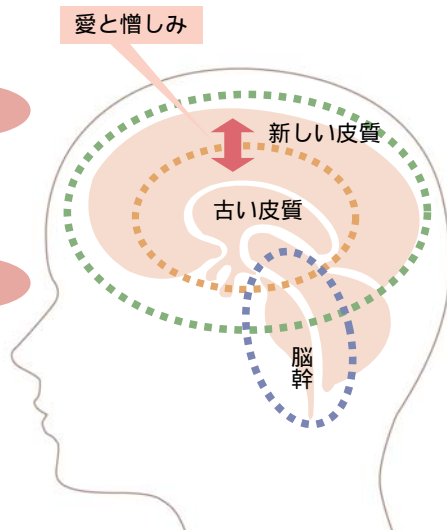
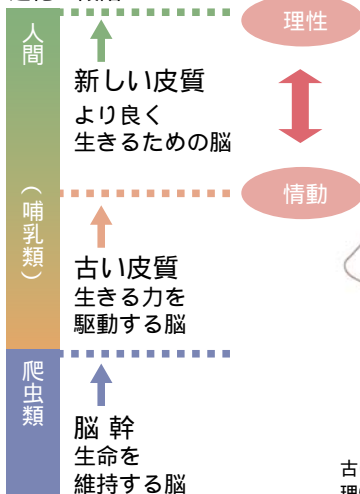


庁科学アカデミーの創立四〇〇周年記念シンポジウムに招かれ、「脳機能イメージングの成果と教育分野への応用展開」というテーマで講演を行ってきた。パチカンが注目するほど、子供がおかれている環境への不安が強まっている。

「しかもその不安は、都市だけでなく、自然が豊かな地域に住む子供の場合でも同じなんです。

脳構造の進化

進化の段階



古い皮質は他の哺乳類と同じ情動を、新しい皮質は理性などをつかさどる。情動部分も、しっかりと育てる必要がある。

いくら自然に恵まれていても、パソコンの画面ばかりのぞいていたらそれが環境になる。その子にとってみたら、自然は関係なくなってしまうわけです。ITは素晴らしい面を持っていますが、どんどん個人化してしまふという本質を備えていることを忘れてはなりません。今起きているさまざまな環境の変化に対して、どういうところに気をつけなければ昔のように健やかな成長が確保できるか。それが今われわれに求められている非常に重要な課題なのです。たとえば赤ちゃんに授乳しているお母さんが、子供を見ないでテレビや携帯の画面を見ていると、きわめて大切な時期がおろそかになってしまいます。赤ちゃんはただおっぱいを飲んでいるんじゃない。肌に触れ、声を聴き、匂いや味がわかっていく。そういう個別の機能は、生まれたときには最低限のものしか備わっていません。それが統合化されるのは生まれてからしばらくの間だけのこともあるのです。特に大切なのは「目交」(まなかい)

と違って、授乳の際に赤ちゃんとお母さんが互いに見つめあって心を通わす過程です」

いつとき、遣伝子ブームが起きて、人間の問題をすべて遣伝子で語る動きが目立った。

「もつそつという説は古くなりま

情動や情操をしっかりと育てる脳の中心部を育む

長期的に子供を追跡調査し、脳機能を計測することによって、子供たちを健やかに育てるために大切な要素が科学的に明らかになっていく。それは素晴らしいことだ。早期教育に血道をあげる親もいるけれど、その弊害も科学が明らかにするだろう。

「今でも見えてくる方向はある程度はつきりしています。人間の成長は、人類の進化の過程をなぞっている部分があります。虫からカエルへ、そして蛇へ。脳の皮質が進化する過程がありますが、人間の脳の成長もそれと同じ。幹の部分じゃなくて、外側の新しい皮質にだけ知識を詰め込んだってだめなんです。まず脳幹や古い皮質の部分を十分に育ててやる。そこに生きる力とか意欲とか情熱をつかさどるものがつまっているのですから、進化の過程に沿って必要なものを育てることが大切です」

子供のころから漢字や英語を教えるよりも、親がテレビやパソコンから離れ、子供を外に連れ出して、一緒に楽しみながら遊んだり、絵本を読み聞かせたりする。両親のぬくもりを肌で感じ、信頼を育てる。その大切さが、やがて小泉さんの開発した光トポグラフィ法で、データとして明らかになっていくだろう。明快な科学があまりない不安をぬぐいさる時期が、少しでも早くしてほしいものである。

したね(笑)。やはり環境が人間を変えるのです。遣伝子はレンガのようなもので、それをどう積んでいくかは環境のなせるわざ。遣伝子に傾きすぎると、大きな間違いをおかしてしまうでしょうね」



# 内発力

のかたち



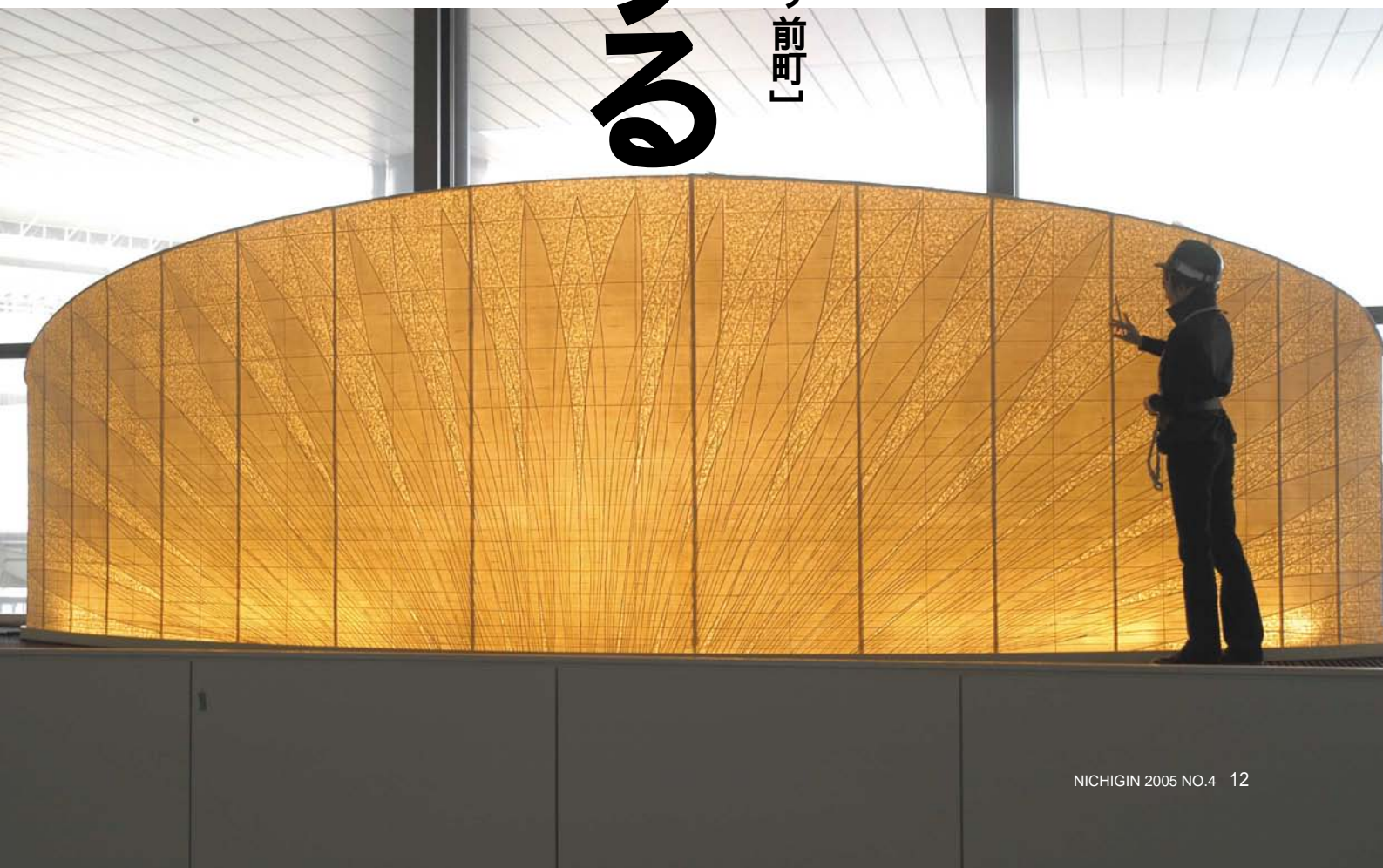
成田国際空港に2006年6月オープン予定の南ウイング到着ロビーに、横幅8メートルもあるオブジェを搬入。搬入・設置には必ず立ち会うのが堀木流。最終的には7点ものオブジェが設置され、日本に入国する人々を楽しませることになっている。

# 和紙デザイナー 堀木エリ子氏の 情操を形にする 意志の力

【京都市右京区太秦森ヶ前町】

インテリアの世界に独自の技術で制作した大型和紙を持ち込み、和紙の可能性を広げた和紙デザイナー・堀木エリ子氏。だが彼女はデザインや美術に関心があったわけではない。職人の精神性に魅せられ、継承しようとする強い意志が彼女を支えた。

取材・文 千葉望 写真 栗原克己



オフィスにはさまざまな作品が飾られ、訪れる者の目を楽しませる。作品の前にたたずむ堀木氏。



和紙とは思えないほどさまざまな形のライト。このような複雑な形を、針金やヒゴなどの支えなしで作る技術は堀木さんが開発し、特許を取得したものである。洋風のインテリアにも合うオブジェ兼ライトとして、注目を集めている。

## 光をはらむ大きな和紙の芸術

大阪・心齋橋そごうに足を踏み入れると、前方に光をはらんだオブジェのようなものが見えてくる。あれはいつたいなんだろう？ 近くまで行って見上げると、それは翼を広げた鳥のようでもあり、神殿の柱を飾る彫刻のようにも思われた。見る者

のイメージを羽ばたかせるこの大きなオブジェ、実は和紙で作られている。

オブジェをデザイン、制作したのは和紙デザイナーの堀木エリ子氏。彼女が制作した和紙のタピストリーや照明、光を生かした壁や天井は、日本ばかりか海外でも高い評価を受けてきた。京都にあるオフィスで、さまざまな作品を見せてもらったが、光の当たりぐあいによってさまざまな表情を生む和紙の可能性の前に、陶然とした。大きく複雑な作品を手で漉き、造形していく技術は堀木さんが独自に開



発したものの。特許を取得している技術もある。確かなことは、制作現場が大勢の人手を必要とする、体力勝負の場だということだ。

「筋力は使いますね。昨日もずっと工房で作業をしていたので、今朝もまだ手が震えています」

デザインを仕事とする堀木さんだが、実は美大の出身ではない。高校卒業後住友銀行に勤め、その後京都の知り合いが和紙開発の新事業を起こすからと誘いがかり、転職したという変わ

り種である。

「勉強は好きだったんです。けれど、私には大学で何かをやりたいという目標がなかった。ひとつの学科に入って可能性を狭めるより、広げる方向に行きたいと思って、社会全般の常識を教えてくださいる場として銀行を選びました」

英語以外は苦手な科目がなく、美術も。だが、絵を描くのが好きだったわけではない。いつも教室の前の席に座り、まじめに勉強する生徒だった。

## 骨折しつつ完走したハーフマラソン

現在の堀木さんを髻髷とさせるエピソードがある。

「高校では陸上部に入って四〇〇m走を始めました。記録が出始めたのは二年生の後半から。四〇〇m走はとても厳しい競技ですが、私はいつも、一番つらいといわれるところに行きたくなるタイプなんです。練習して、記録が伸びだして、最後は非常にいいところまでいきました。努力と気力かもしれません。」

あるときハーフマラソンに出

場したのですが、出場前足の甲の骨が痛かったため、コーチに棄権したいといったんです。走り出して途中でやめるのが何より嫌なものですから。でも、コーチは使いたいからと許してくれませんでした。それで走り出したんですが、だんだん腰までしびれてきた。これはまずい、早くゴールしなきゃとぐんぐん飛ばしているうちに、優勝して

ほりき・えりこ 和紙デザイナー。国内外で多彩な活動を続ける。日本建築美術工芸協会賞、インテリアプランニング・国土大臣賞、日本現代芸術奨励賞など受賞歴多数。著書に『和紙の光景 堀木エリ子とSHIMUSのインテリアワークス』がある。

工房で大きな和紙を漉く。中腰となつて行う作業はまさに肉体的労働。求める表現を追い求めるために、さまざまな道具を使って力を込め、叩きつけるような作業を続けることも。冬は顔から湯気が立つほど。  
撮影：三浦憲治



しまいました。それから病院に行ったら『複雑疲労骨折です』と言われまして(笑)」「  
負けず嫌い、強い意志と努力。特に才能があったわけではないといながら、出会った和紙の世界で大きな花を咲かせた。それは偶然を必然とする、彼女の強い心があつたからだ。  
経理としての人社だったが、そのうち和紙作りの現場に魅せられていく。大変な手作業の連

続である手漉き和紙は高価で、機械漉きと価格競争すると到底かなわない。最初に入った会社は閉鎖してしまつた。だが、和紙に惹かれる心はもう留まらなかつた。職人さんたちの仕事をなんとか残したいと思つた。  
大変な環境は承知の上、かつて女性には苛酷な四〇〇m走をめざしたときと同じような、むずかしいものだからこそ燃える気持ちを支えたつた。

手漉き和紙を便箋やポチ袋にしたら、機械に負けてしまう。だがインテリアだつたら太刀打ちできるのではないか。そう考へて、呉服問屋の支援を受けて自ら立ち上げた会社では建築家やデザイナーとのコラボレーションを仕掛け、成功させた。  
「とはいえ最初の年は三〇〇〇万円の赤字(笑)。もうやめてくれといわれましたが、私は落ち込みませんでした。メーカーでいうなら研究開発投資みたいな赤字で、内容には一切無駄がなかつたし、どうすればそれを解消できるのか考えればよいだけだと思ひましたから」

試行錯誤の中で、堀木さんは和紙制作の新しい技術を開発し、従来の和紙のイメージを打破するような大型の作品を世に送り

## 日本の和紙には深い精神性がある

堀木さんに日本の和紙と、ほかの国々の手漉き紙との違いをたずねてみた。

「基本的な技術に変わりはないんです。日本の和紙は繊細だといふ特徴がありますが、でもそれ以上に違うのは、紙を漉く作業の奥にいろいろな精神性があるといふことなんです。

日本の職人さんは『白い紙は神に通じる』という精神性やつていらつしやる。寒い中、冷たい水に手を浸して繊維を浮遊させながら、ゴミや砂粒を取り除くという地道で緻密な作業をいといません。紙は神に通じるのだから、少しでも不純物を取り除くのだといふ気持ちからの行動ですね。越前には紙漉きを教えた女神様をまつる神社もあるほどです」

その精神性と技術を受け継ぎ

出していった。現代建築の中に組み込まれても違和感がなく、それでいて安らぎを感じさせる作品のファンは増え続けている。

つつ、今までにない和紙を作り、和紙の世界を広げるのだといふ心。堀木さんの作品を前にすると、人はみな「やすらぐ、癒される」といふ。

「でもそれは、和紙そのものの持つ力なんですよ」

私たちはデザイナーやアートの世界を、すぐに美的感覚とだけ結びつけて考える。だが、そこには何かをやり遂げようとするつよい意志が必要なのだ。豊かな情操を支える内発的な力。

「この仕事に向いているかどうかなんてわからない。ただ、仕事は決心だと思ふ。やり続けようと思つこと。それがあつたら、私はここまできたんです」

かつて、足を骨折しつつハーフマラソンを駆け抜けた少女は、和紙の世界でフルマラソンを完走しようとしている。